2016 AUTUMN / WINTER

KIMAI

医学生と香川民医連をむすぶ情報誌。

CONTENTS

・キラっとかがやく医師のしごと
・研修医日記
・ベトナム医療支援報告
・高校生の広場

香川民主医療機関連合会

※キマイ＝讃岐（さぬき）弁で「来てね」という意味

香川民医連

キラっと

かがやく医師のしごと

家庭医という専門医のことをはじめて聞く人もいるかもしれませんが、地域医療を担う重要な役割をもち、近年注目されているプライマリ・ケア分野のひとつです。高松平和病院の佐藤龍平医師（内科・家庭医）に、ご自身の専門である“家庭医”についてお話してもらいました。

「家庭医」

こんにちは、高松平和病院6年目医師の佐藤です。私の専門は「家庭医療」です。臓器別の専門ではないけれど、総合内科ともちょっと違うという立場です。

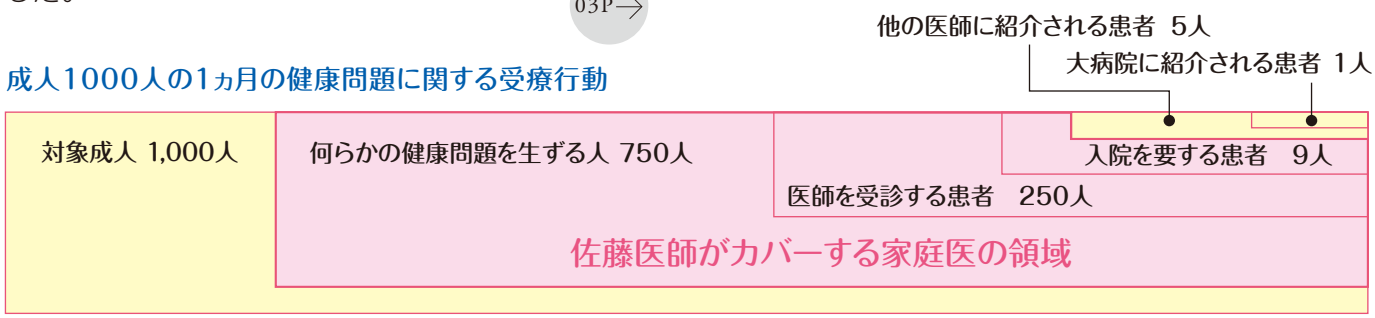
では何をやっているのか？「かかりつけ医」です。

これを読んでいるのは主に学生さんだと思われるので、かかりつけ医といってもピンとこないかもしれません。かかりつけ医とは「近くにいて（近接性）」「何でも相談に乗って（包括性）」「長く付き合っていく（継続性）」存在です。診療所やクリニックの医師がイメージしやすいかもしれません。「患者さんを全体的にみて健康のお手伝いをしたい」と考えていた私にぴったりだと思いこの道に入りました。

03P→

▲家庭医は、年齢、性別、病気の種類を問わず、ちいさな赤ちゃんから高齢の方まで、対応できなければいけないので豊富な経験が必要。

成人1000人の1ヵ月の健康問題に関する受療行動



家庭医は医療機関に受診する患者さんだけでなく、その地域で何らかの健康問題を生ずる人まで身近な存在として支え続けることが求められます。

Dr佐藤インタビュー

Q 「趣味は?」

A アクアリウム。ネコをかわいがること。

Q 「オススメの本は?」

A 「アルジャーノンに花束を／ダニエル・キイス」異なる立場の人を理解することを学べます。

Q 「医師をめざした理由は?」

A 最初は何となく医学部に入るんだ、と漠然な気持ちでいましたが浪人時代に、「なぜ医師をめざし続けているのか?」ということを考え始めました。医師というのは、人が困った時やピンチの時に、その人の隣にいる人です。そこには常にドラマがあり感動が生まれ、やりがいのあるかっこいい特殊な職だと思うようになったのが理由です。

Q 「高校・大学時代で一番思い出に残っていることは?」

A 屋久島での離島実習です。鹿児島大学5～6年次の授業で“離島医療実習”というカリキュラムがあり、私は屋久島の診療所を選択しました。島の南西部の医療を担っている診療所で、そこの医師は地域まるごと、地域に根差したまさに“地域医療”をしているのです。将来の島の医療に係ること（島民の平均年齢、○年後には介護施設が必要だ等）を分析して、必要なことならば診療所を飛び出して自分で行政に働きかけていました。この医師に出会ったことが、私が家庭医をめざすきっかけです。

Q 「医師になってから一番思い出に残っていることは?」

A 初期研修医の頃、地域の高齢者の集まりに医師として参加した時に、高齢の女性の方に「私の死に水を取ってね。」と言われたことです。地域医療に求められていることは、こういうことなのだと感じた出来事です。

Q 「医師になって喜びを感じるのはどんな時?」

A ①診断が正しかった、予想通りだった時。
“この患者さんの病態を自分は掌握した”という科学者（scientist）的な喜びです。
②患者さんと一緒に問題を乗り越えたと感じる時。
患者さんというのは、何かしら問題を抱えて病院にやって来られます。その問題は病気だったり社会的な問題だったり様々です。仮に亡くなられたとしても、その人の人生のイベントをともに一緒に乗り越えたんだ、というアーティスト的な喜びを感じます。

Q 「医師を目指す高校生・予備校生へのメッセージ」

A 仕事量が多く勤務時間も不規則で中々努力が報われるとは限らないのですが、そんな辛い時もそれに勝るほどの喜びを感じられる職です。「生まれ変わっても医師になりたい」こう思えるような職は中々ないと思います。

Q 「医学生へのメッセージ」

A 医学生向けに臨床推論セミナーを不定期開催しています。日々の診療の中から事例を出したりします。詳細は、「高松平和病院　医学生・研修医のページ」をチェックしてくださいね。
http://www.heiwahp.com/

佐藤 龍平医師

Doctor Ryohei Sato

profile

高松平和病院　内科・家庭医

香川県出身　高松高校卒　鹿児島大学2011年卒

Doctor Ryohei Sato

「家庭医」

▲佐藤龍平Dr家庭医療専門医試験合格を医局でお祝い。2016年10月

家庭医が働く場面は診療所などの外来だけでなく、病棟での入院管理や在宅診療など多岐にわたります。でもやはり、外来診療が専門性を発揮する場だと感じています。風邪症状で来院した患者さんが本当に風邪なのか。肺炎や急性喉頭蓋炎（こうとうがいえん）などではないのか（風邪の診断は意外と難しいものです）。中年女性の疲れやすさは本当に更年期障害なのか。高齢者の認知症は本当に年齢のせいなのか…総合性をもっているからこその問いかけです。

「本当に?」の問いかけはまだ続きます。この人は本当に「風邪を治してほしくて」来院したのか?本当に心配なことは別にあるのではないのか?「こどもの喘息」の原因は本当に寒さなのか?他に原因があるのではないか?（例えば両親の喫煙）

家庭医の専門スキルは「コミュニケーション」です。患者さんは病気をどのように経験し解釈し、何を心配しているのか。専門スキルを使って明らかにすることは診断の助けになるだけでなく、本当の心配事に働きかけることで患者さんの安心に繋がります。そうやって関係性が育ち、かかりつけとなることで今後の健康問題に関わりやすくなります。外来に限らず、患者さんと家族に関わる場面は、私にとっては一つの舞台です。患者・家族が主演であり、私は脇役です。“よい映画には名脇役あり”と言われます。今日も助演男優賞を狙って診察室に座るのです。

出典:Crouch M, Roberts L:The Family in Medical Practice. Springer, New York, 1987

患者さんの背景には多くの家族がいて、お互いに影響しあっている。患者さん独自の背景を理解することで、解決できる問題も多い。

▲あらゆる可能性を考察し診断する佐藤Dr

研修医日記

研修医に日々の研修模様を
語ってもらいます

植本真由医師

Doctor Mayu Uemoto

Profile

高松平和病院二年目研修医
（旧姓：塚本）
香川大学2015年卒　滋賀県出身

こんにちは(^^) 初期研修2年目の植本真由です。
研修2年目になりましたが、
私自身には特に大きな変化もなく、
1年目と比べてあれができる!これができる!みたいな
確信のないまま（笑）、この8月までゆるゆると2度目の
内科をまわっていました。まだまだ勉強の日々～です。

「外来研修とネコ」

2年目の内科で外来研修が始まりました。上級医の佐藤龍平先生と初診外来に入ります。佐藤先生は家庭医（専門はなく、何でも診るよの町のお医者さん）で、ネコと後輩指導が大好きな6年目の先生です。口癖は何かにつけ「にゃ」をつけることです（「疲れたにゃ～」「にゃんだって!」等）。まじです。少しくせが強いかな～と最初は思うかもしれませんが、その口癖とネコに対する熱い思いを聞いている内に、なんだか妙に先生に似合ってるなと納得し、日常会話でも誰も突っ込むことなく会話が進んでいきます。

● ● ●

初診外来には色んな症状の患者さんが来ます。例えば『頭痛』とか『発熱』とか。この症状から、①どんな疾患が思い浮かぶか?②その中で見逃してはいけないものは?③見逃してはいけない疾患を除外するための問診や身体所見は?④その他確定診断に近づくための問診や身体所見は?⑤それらを踏まえてどんな状況ならどんな対処（検査や治療、指導）をする?などなど質問されます。「あちゃ～、わかりません!」なことも多々あるのですが、佐藤先生のキリッ!にゃっ!とした指導の元、1つ1つ確認していきます。

● ● ●

そんなこんなで外来に臨み、患者さんのお話を聞き、所見をとり、もろもろ説明をして、時に検査をしたりしながら、汗をかきかきなんとか終了します。隣の佐藤先生の外来診察の合間に詳しい経過と処方の確認、簡単な振り返りをしてもらいます。「やってみてどうだった?」と聞かれ、自分でもあーしたらもっと良かったーなどむにゃむにゃ言って、診察から振り返りまでが終了します。

● ● ●

外来では医学的なことだけではなく、診療姿勢や態度、話術など学べることがたくさんあります。何より、色んな訴えをもつ色んな患者さんと話すのが楽しく、とっても勉強になります。あと高松平和病院限定ですが、佐藤先生のネコトークも味があります（笑）。もしかしたら、難しいこと考えてる私を和ませるための話術なのかもしれない…とちらっと思ったんですが、別に時間場所に関係なくネコネコ言ってはるので、やっぱりネコが好きなだけなんやろうな～と今思い直しました。

● ● ●

▲バイク4人乗りは普通

ベトナム医療支

この支援活動は10年以上継続して行われています。NPOのコアメンバー（医師、セラピスト、看護師）に加えて、毎回さまざまな地域の職場、職種が参加するのが特徴で、新たな支援の輪が拡がり、結果として支援の質が高まっています。

今回の訪問では、フェイスブックでの呼びかけに応じてくれたベトナムホーチミン医科大学の学生や、ホーチミンで開業している医師、JICA（国際協力機構）でホーチミンの病院でリハビリ指導を行なっているセラピスト、来年JICAでインドネシアへ赴任するセラピストが参加してくれました。

訪問したタイニン省はベトナム最大都市ホーチミンから西に80キロ離れた、カンボジア国境に接する農村地域です。8月は季節的に短いスコールがありますが、概して快晴に恵まれました。亜熱帯地域なので直射日光はさすがに熱く、絶えずペットボトルを携帯して活動しました。

現地病院での活動

障害者・児が入院する病院（平和村と呼ばれている）で、医療指導支援としてセラピストへの講義と症例検討会を行います。

今回の特徴はVNAH（※注2）のアン医師と日本からのセラピストが症例検討で、リハビリ方法に関して、熱心な議論を行なったことでした。アン医師は、ホーチミンのリハビリ養成学校の元教授であり、障害にたいする深い知識があるので、場合によっては1症例1時間以上に及ぶ検討会でした。日本側のセラピストとの意見の違いから、ベトナムでの障害者医療の現状の一部を垣間見ることができました。

入院中の患者、職員との交流会も行いました。日本の文化・娯楽を知って楽しんでもらおうと、日本の京都から参加したプロのマジシャンのショーや、香川大学医学生の冨谷さんの空手の段取りは開場を沸かせました。ベトナムの方々も流行の歌を披露してくれ、心がつながる交流会となりました。

※ 注1:京都民医連の医師・セラピストが、国際的な医療・リハビリを支援することを目的として2005年10月に設立したNPO法人。高度な医療設備や専門的医療スタッフに恵まれないベトナム南部タイニン省の農村地帯で、地域に根差したリハビリテーションを支援しています。日々地域の障害者を訪問し、訓練や生活指導を続けるワーカー（CBRワーカー）たちや、そのワーカーの教育を担当するリハビリテーション病院の訓練士たちを指導しています。

※ 注2:Viet-Nam Assistance for the Handicapped（VNAH）:ベトナムの障害者を支援するベトナムのNPO。今回、米国企業からの寄付金をもとに5カ年計画の地域リハビリ（community based rehabilitation CBR）を支援するプログラムを立ち上げた。リハビリ評価と結果を検証することを重視している。私たちの活動を高く評価している。

▲貸家が多い。亜熱帯地域なので造りは簡素。電気はあるが水道はない。

▲地域訪問

援報告

この夏、NPO法人ベトナム・タイニン省の地域リハビリテーションを支援する会（※注1）のベトナム訪問団（7月31日～8月3日）に小児科・中田耕次医師が参加しました。その訪問活動の様子をまとめて報告します。

地域訪問活動

障害者・児が暮らす家庭へ2グループに分かれて訪問活動しました。

田園地帯にある小さな保健所（兼診療所）で、現地スタッフと合流。セラピスト、CBR（地域リハビリ）ワーカー、医師、看護師で総勢10人近くが、ワゴン車で移動。道が狭く車が入れない家もあるので、多くの訪問では車を降りてあぜ道を歩きます。

さまざまな障害者・児が在宅で、家族の介助により生活しています。障害状況を評価し、家庭でできるリハビリ内容や生活動作をアドバイスします。日本では障害に応じた補助具が準備されますが、ベトナムでは皆無に近い状況です。たとえば、車椅子はあるのですが、体格にフィットした作りではないので、多くは使用できずに放置されていました。

訪問したある家庭では、脳性麻痺の子どもを高血圧症の母親が介助していましたが、排尿の介助について困っていました。姿勢を補助する道具や、定期的な排尿導入などのアドバイスをしました。しかし貧しい家庭のため、母親は毎日服薬すべき抗高血圧薬を、一日おきに服薬していました。医療制度が整備されていないベトナムでは、医療費が払えずに治療を中断することは日常的にみられることです。

▲医師、セラピスト、看護師、医科大学の学生などが集合しての打ち合わせ。

中田 耕次医師

Doctor Koji Nakata

profile

へいわこどもクリニック所長　小児科

香川県出身　高松高校卒　徳島大学1981年卒

Vietnam

ベトナム医療支援報告

VNAHとの連携

VNAHが、5カ年計画でこの地域を対象に障害者支援活動を行うことを検討しており、私たちのこれまでの活動と共同できるかどうか意見交換を行いました。今回、VNAHの責任者のアン医師とセラピストが参加し、一緒に行動しました。リハビリ評価基準を決め、リハビリの効果を検証する作業が準備されており、共同できればすばらしいと思います。VNAHは、ベトナムの保険制度の中にリハビリ医療を組み込むことや、障害者支援をする人たちの教育費も国が負担するように働きかけている、とのことでした。これが実現すれば、障害者とその支援者への福音となると思います。

▲子供たちの澄んだ目の輝きが印象的。

①現地のセラピストを指導するアン医師②ベトナムの病院職員がベトナムの流行歌を披露③七夕まつりで歌を歌う子供たち④平和村でのリハビリ指導。アン医師と日本のセラピスト⑤脳性麻痺児を診るJICAのセラピスト⑥家庭訪問。父親が懸命に子どもの世話をしている。家庭での生活動作のアドバイスを行なう

ベトナムの医療事情

この訪問には、ベトナム人で日本の医学部を卒業し、京都民医連で働く青年医師が参加しており、彼からベトナムの医療事情を詳しく聞くことができました。

ベトナムでは、日本のような国民皆保険制度がなく、公務員などの一部が加入する公的保険制度があるだけで、ほとんどの治療は自費診療です。さらにこの公的保険は、保障している医療内容が乏しく加入するメリットが少ないそうです。大都市のセンター病院では日本と同レベルの医療を行なっていますが、その対象はごく一部の富裕層です。

医療の原則は「必要な人に必要な量の医療を行う」ことです。国の最高水準の医療を国民に平等に提供するために、ベトナムでは模索が続いているとのことでした。

さいごに

このNPOの特徴のひとつは、民医連で働いている職員をコアメンバーとしていることです。民医連は、経済大国である日本で無差別平等の医療・介護の実現をめざして医療活動をしています。発展途上国ベトナムの医療・介護に接してみると、その意義をあらためて学ぶことができます。

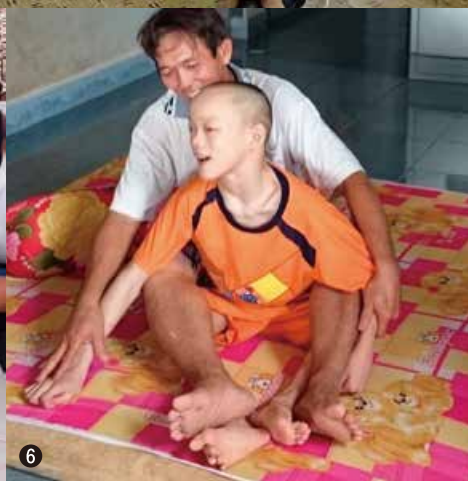
毎年夏訪問予定なので、医学生のみなさんの参加を歓迎しています。

2

3

4

5


6

ベトナム医療支援に参加して

香川大学医学部医学科2年
冨谷　紘加

今回のベトナム訪問で一番印象に残っているのは子供たちの笑顔です。タイニン省のリハビリ施設訪問の際、イベントとして七夕まつりをしました。子供たちと風船や折り紙で飾りつけをして、一緒に盆踊りを踊ったり歌を歌ったりしました。私はベトナム語がわからず子供たちと言葉でのコミュニケーションをとることはできませんでしたが、一緒に遊んでいるうちに心を開いてくれたように思います。イベントが終わるころには子供たちの方から抱きついてきてくれて、本当に可愛かったです。

また、ベトナム戦争の際に枯葉剤の影響と考えられる障害を持って生まれてきた子供たちの保護・リハビリを行っているツーズー病院に訪問しました。実際にそういった子供たちを対象とした医療現場をみたことはなく、思った以上に衝撃をうけました。

▲空手の段取りを披露しました。

しかし、心はほかの子供たちと何も変わらず、遊ぶことが大好きな可愛らしい子たちばかりでした。そこで保護されている子供たちの大半は大人になるまで生きることができないと聞き、本当に悲しかったです。

現場で働いている医療従事者の方々と一緒に行かせてもらい、改めて自分の無力さを感じました。これからしっかり勉強して実際に人を助けることができるように頑張らなければ、と思いました。

高校生の広場
Plaza of high school students

2016夏2つの医師講演会を開催

7/18
Dr原田の地域医療cafe

高校生を対象とした講演会をサンポート高松会議室で開催しました。講師は高松平和病院の原田真吾医師。日常診療の一コマから原田医師なりの地域医療について話されました。また、漫画“ブラックジャック”を例に挙げ、医師になるには「科学性・人間性・社会性」の3つが必要。どれかひとつだけではなくすべて必要だ、と話されました。

講演会後は、原田医師と医学生との質問交流会。参加者はお菓子を食べながら、ざっくばらんに交流をすることができました。

感想

「医師・医学生両方の視点から質問に答えてもらい、ただ質問に答えるだけでなく、内容を発展させて答えてくれた。堅苦しくなくてとても質問しやすい環境でとてもよかった。」

「地域医療についてあまり詳しく知らなかったので、例や経験談を聞くことができ、もっと詳しく知りたいと思った。」

9/12
医師講演会in高松高等予備校

高松予備校生を対象とした講演会を高松高等予備校で開催しました。講師は原田医師と、愛媛生協病院の水本潤希医師。

水本医師からは、経済的理由で手遅れになった患者さんの事例を紹介し、病める人が必ず病院に行けるわけではない、ということを心に留めておいてほしい。そしてその原因について考えることができる医師になってほしい、と話されました。予備校生は熱心に聞き入っていました。

講演後、質疑応答の時間を設けました。終了後も医師2人を囲んで質問をしていました。

参加した学生さんたちは、なんのために医師になるのか改めて考える契機になったようです。来春おふたりの先生のような志を持った医学生がたくさんうまれることを期待しています。

感想

「医師を目指すにあたって、どうして自分が医師を志したかが再確認でき、また受験に対するモチベーションも上がった。」

「普段私たちが想像している医療だけではなく、内面的（経済的、地理的）な問題も医療は抱えているんだということを知ることができてよかった。このような方々を助けたいと思った。」

▲熱心に講演を聞く高松高等予備校の生徒さん

01

高校生 1日医師体験は 毎年春・夏休み開催

■1回目　ベーシックコース
■2回目　ステップアップコース
■3回目以降　アドバンスコース

02

医学科 受験模擬面接

（3年生・予備校生対象）

■日程:10月8日（土）、2月4日（土）

2016夏休み医師体験を開催

今年も高校生・予備校生を対象とした夏休み医師体験を開催しました。医師体験参加回数に応じて4つのコースに分けて実施。

1回目:ベーシックコース　2回目:ステップアップコース
3回目以上:アドバンスコース　予備校生:予備校生コース

なるべく医師と関わる時間を作っているほか、日によっては医学生との交流も一緒にすることもできました。実際に医師が働いているところを見学したり、同じ夢を持っている人と一緒に体験することで、参加者のみなさんはモチベーションが上がったようです。

感想

「ケアマネジャーさんのお仕事に同行させていただいたり、患者さんと直接お話をしたり普段は中々関わることのできない方々と交流ができたのでとても自分のためになった。」

「とにかくすばらしい体験ばかりで来てよかったです。数分単位でどんどん患者さんを診ていく医師の姿は想像以上に過酷だと感じた。また、医師一人でこんなに密度の濃い医療をしているなんて、ましてこれに関わる人が何万人となると医師の職業はどれほど責任が重いのかと痛感させられた。医師とは何かが自分の中で少し見つかった気がする。」

県内10校 28名が参加

▲医療機器体験(血圧計)

▲医師との交流

▲患者さんとの交流

My recommendation

私のオススメ

【紹介者】
高松平和病院
医師事務支援課
池内　優貴子

【バレエ音楽／「ドン・キホーテ」～キトリとバジルの恋物語～】

はじめまして。高松平和病院の医師事務支援課で働いている池内です。

まず“医師事務支援”ってどんな仕事してるの?って思いますよね。医師の事務作業を補助するお仕事です。仕事内容は、カルテ記載・処方・注射指示記録等々の代行業務、書類作成補助もあります。この仕事をしていて思うことは、毎日色々な患者様と接し、医療の勉強ができること。カルテや処方オーダー代行をする際に、分からないことがあれば医師に質問し、理解した上で業務に取り組めるので、とても有意義な仕事だと思っています。毎日色々な気づき・発見があるので、これからも勉強を欠かさずより質の高い医療を提供できるよう努力していこうと思っています。

今回は私の趣味をお話します。私は3歳からバレエを習い始めました。ピアノや書道、水泳、茶道などほぼ毎日習い事をしていましたが、その中でもバレエが本当に好きでほぼ毎日踊っていました。年上のお姉さんたちの舞台練習を見て憧れていた私はバレエ科に進学し、舞台の一員に入れて頂いたことが夢のようでした。一生懸命練習し、「くるみ割り人形」「眠りの森の美女」「ジゼル」等の舞台出演をすることができました。

2005年（当時19歳）、島田芸術舞踊学校創立50周年記念として、高松交響楽団との共演による「ドン・キホーテ」を催しました。バレエ曲の中で私の最も好きな曲。なぜかというと、唯一ハッピーエンドの演目だからです。高い技術は必要だけど、登場人物のキャラクター性が強く私の性格にもよく似ていたので、踊っていても楽しかったです。曲自体も明るくて、出演者・観客みんなで盛り上がる曲。私はこの曲の出演が決まった時、先輩方のバレエを見て憧れていたこともあり、非常に嬉しかったことを覚えています。

ざっくりあらすじをいうと、宿屋の美しい娘キトリにはバジルという貧しい床屋の恋人がいましたが、父親ロレンソはキトリを金持ちのガマーシュと結婚させようとしていました。キトリはバジルとの結婚を許してくれるようにと何度も父親に頼んでいましたが･･･あとは舞台やDVDなどで観覧してくださいね。

あの有名な熊川哲也さんも「バレエを知らない人でも楽しめる演目だ」と絶賛したくらいおすすめのバレエです。見たことがない方は是非ご覧ください。

香川医療生協

医学生 奨学生 募集中。

奨学金制度の趣旨

この奨学金制度は、医学部卒業後に香川医療生協・香川民医連の病院で研修し、地域医療に参加しようとする医学生を対象に、勉学などの経済的な援助を行う目的で設けています。

奨学金概要

一般	1〜2年生	5万円/月額
	3〜4年生	6万円/月額
	5〜6年生	7万円/月額
特別	全学年	12万円/月額

※返済免除規定あり

奨学生になったら

point 1 全国の医学生と学び合えるチャンス！

point 2 低学年から病院実習をかさねて将来の医師像を掴める！

point 3 学生生活中のサポートが手厚い！

高校生予約奨学金制度もあります。

申し込みは随時受け付けています。お気軽にお問い合わせください。

香川医療生活協同組合

厚生労働省 指定臨床研修病院 高松平和病院

〒760-8530 高松市栗林町1-4-1
tel.087-833-8113(代表) fax.087-831-1254

みき分室（医・看護学生サポートセンター）

〒761-0701 木田郡三木町池戸1538-1森ハイツ1F

お問合せ・連絡先

高松平和病院

学生担当/小池、中田、野口
tel.090-7579-4259 mail:heiwahp@gmail.com

民医連 香川民主医療機関連合会
高松市栗林町1-6-4
tel.087-836-9375
fax.087-836-9376

2016.9リニューアル
http://www.heiwahp.com/
高松平和病院 医学生・研修医のページ 検索

〜日々の学習企画案内・報告をblogで随時更新中〜

編集後記

医師が仕事内容や医療活動について語る記事が今号は3つあります。医師のコラムは私自身読んでいて、新たな発見があったり勉強になるしとても面白いです。それに読んでいて感じた方もいると思いますが、今号はある医師の人となりが色濃く出ています。愛されキャラです。その辺りも楽しみながら読んでみてくださいね。

発行元：香川民主医療機関連合会